

- させなければならないが、それは困難である（注6参照）。
- 8 □で伝える伝道説教のための補助として用いられた、ルース・リーフ・ファイルのようなスタイルの記述発言録であるQ文書の文学的特徴については、今日まで佐藤研の見解が先駆的である。M. Sato, Q und Prophetie. Studien zur Gattungs- und Traditionsgeschichte der Quelle Q (WUNT 2/29), Tübingen 1988.
- 9 以下の文献を参照。A. Beyer, Artikel "Gottessohnschaft (AT)", Wissenschaftliches Bibellexikon (2015), online: <http://www.bibelwissenschaft.de/stichwort/84316/>
- 10 アダ生涯四、サンヘドリン五b、創二・一九以下、モーセ黙一〇―一二。義人に対する野獣たちの恐れと天使の守りについては以下。遺ナフタリ八・四。
- 11 終末の徴として、楽園での動物との平和的共存は以下を参照。エレ一・六―八、六五、二五、シリ・バル黙七三・六。
- 12 本書第一部第二章参照。
- 13 とりわけヨハネ一四・六―七、さらにマルコ九・三七参照。
- 14 教会の伝道の性格は、マルコがとりわけ弟子派遣のモチーフを話題にするという（三・一四以下）福音の普遍的な要請と対応している。それゆえに、マルコは異邦人伝道を地上でのイエスの生において定め（五・一八―二〇、七・二四―八・一〇、一三・一〇、一四・九、一五・三九）、それが確実に働くように権限を与える。
- 15 苦難の告知（八・三一―三二a）——弟子の無理解（八・三二b、二六）——十字架に従うことへの要請（八・三四―三七）の反復は、九・三〇―三一、九・三一―三四、九・三五―三七の類似した反復と対応している。八章にある十字架に従うこととは、九章と一〇章にある地位を拒絶し、奉仕することと呼ばれる。十字架に従うことの詳細とは、この拒絶と奉仕であり、受動的な苦しみへの準備だけではない。

一五において始められる地上のイエスの登場がそれを意味している。人の子・世界の審判者であるイエスの再臨に際して（一三・二六―二七、三二、八・三八―九・一）、この神の支配権は世界全体に見える形で到達する。神の支配権は地上での人としてのイエスと深く結びついている。それに対して、マルコ一・一を主語的属格、及び目的語的属格の両方の意味に捉えるのは、例えば以下の文献を参照。M. E. Boring, *Mark: A Commentary*, Louisville: Westminster John Knox Press, 2006, 30; E.-M. Becker, *Das Markus-Evangelium im Rahmen antiker Historiographie* (WUNT 194), Tübingen: Mohr Siebeck, 2006, 104-105. しかし、トルロー・一をこのようなアンビバレンツなものとして受け取る必要はないだろう。

5 例えは以下の文献を参照。Herodot. *Hist.: Hupothoton Akakapnwtos: isotophē anōthēs hōe. xōra* に七〇人訳に
おいて、例えばアモ一・一、ネヘ一・一、エレ一・一―三は、その書物全体を指している。

6 マルコ一・二以下は構文上、一節ではなく、四節と結びついている。同様の見解は以下。D. Lührmann, *Das Markusevangelium*, Tübingen: Mohr, 1987, 33. 〃の意見に反対するのは以下の文献を参照。G. Arnold, *Mk. I.1 und Eröffnungswendungen in griechischen und lateinischen Schriften*, ZNW 68, 1977, 123-127. 〃 〃
は 123-124.

7 マルコ一・一に関する同様の見解は、例えは以下の文献を参照。J. Marcus, *Mark 1-8*, New Haven: Yale Univ. Press, 2002. それに反して、その他の研究者、例えば Arnold (注6参照) や Becker, 110 (注4参照) は、「はじめ (ἀρχή)」はマルコ福音書の初めの部分を指しているに過ぎず、つまりマルコ一・一はおそらく書物の始まりを指していると理解している。例えはホセ一・一をこの並行箇所として指摘している（一・一 λόγος κηπιού¹ 一・二 ἀρχὴ λόγου κηπιού πρὸς Σαυλ²）。しかし、〃の箇所では「はじめ (ἀρχή)」の内容は書物のタイトルに含まれておらず、二節に登場している。また、例えはタキトウスの『同時代史』の始まりの箇所は、マルコ一・一のはっきりとした平行箇所として考慮されている (*initium mihi operis Servius Galba Hierum Titus Vinus consulis erunt*)。タキトウスは、その作品を執政官時代のガルバとティトウス・ウェニウス（紀元後六九年）から始めることを表明している。だが、この始まりの箇所はマルコ一・一とは違い書物のタイトルではない。タキトウスを平行箇所とするためには、マルコ一・一を構文上、二節と三節と接続

の宣教が、彼らにとって十字架と苦難を意味することであるとしても（二三・一〇—二三・八・三四—三五、一〇・二九—三〇）。弟子たち、この失敗者たちは、イースターの後、彼らに与えられた新たな委任において、「*sola gratia*（恵みのみ）」の二本となる。教会はそれのみを基にしているのだ。マルコ福音書の物語に記された地上のイエスが、いつもこの失敗者たちを手放さず、彼らの理解を深めるように取り組みながら、書物の最後に至るまで弟子に値しない弟子たちを支え続けたように、神はイエスの死と復活の後、この弟子たちを支え、さらに仕え続ける。恵みを受けるに値しない者に与えられた恵みの行い。これこそが、喜びの使信である。

（吉田新 訳）

注

- 1 以下の文献を参照。H. de Wall, Artikel "Evangelisch", RGG 4. Auflage, Tübingen: Mohr Siebeck, Vol. 2, p. 1709.
- 2 この場合、英語では区別することができないが——少なくともドイツ語では——「福音主義 (evangelisch)」は「福音派 (evangelikal)」と区別することができる。「福音派 (evangelikal)」とは福音主義の教会内の一グループであり、とりわけ福音に基礎づけられたものとして理解され、往々にしてそこには原理主義的傾向が認められる。

3 (オリゲネスに反して) 私は写本 B、W、D 等と共に「神の子」を本文に採用する。

4 この福音の内容とは、神がその支配権を伴って近接することである。より明確に言うならば、一・一四—

入れた（一四・八）。逃げだす代わりに、最後まで困難に立ち向かった他の女性たちも同様である。隣人の負担を軽くするために、文字通り十字架を背負ったキレネ人シモンも同じように行う。

ここにおいて、残っている問題が二つあるだろう。教会の読者と共にある教会は、この不愉快な弟子への同一化、マルコの物語を通して、読者を不愉快な思いにする弟子たちを鏡としたこの自己批判の目といったどのようなように関わることを望んだのか、という問いを立てるべきである。彼らは福音の不愉快な側面、その批判の可能性を受け入れるのだろうか。この問いは、今日に至るまでのマルコ福音書を読むあらゆるキリスト教の読者に向けられている。教会は、自己批判の教会であるべきだとマルコは考える。それは、「常に改革される教会 (ecclesia semper reformanda)」としての自己像へと開かれていく。自身とここでは使徒としてあげられている代表的な権威に問いを向けることを恐れず、また彼らに対して、その無力さ、(教会の)ヒエラルキーへの執着(九・三四―三五、一〇・三五―三七)、無理解、拒絶と挫折を公然と明らかにすることを恐れない教会である。なぜなら、その欠点を言い繕うことはできず、口実逃れもできない。それは同一化された読者にとっても同じである。このマルコ福音書は、実に不愉快な書物なのだ。

しかし、二つ目としてあげられる点は、マルコ福音書の最後の言葉が批判や裁きではなく、神の祝福ということである。マルコ福音書の結末では、神はもう一度弟子たちとその教会に向かう。弟子たちの共同体という形で表現されている教会の失敗に対して、神は復活をもって答えを与える。この祝福の行いは、マルコ福音書の読者が知るように、弟子たちを福音宣教師へと変える。それによって、彼らはイエス・キリストと神を宣教するために世界へと出て行けるのだ。たとえば、この福音

つになる。それは自分の一部を他者に差し出すことにより、本物になれるアガペー(愛)である。

マルコ福音書一〇章四五節では、キリストを通して与えられた恵みのもとの上に倫理的な要求がなされる。その恵みにより、キリスト教徒たちは倫理的な求めに応じた素質を持つことができる。倫理的な求めと神から与えられた恵みは、「他の人に仕えよ」と呼びかける(一〇・四三―四四)。「人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである」(二〇・四五)。救われた者として、キリストに「仕えられた者」として、キリスト教徒は他の人々に仕えることができる。

マルコは、仕える生き方を喧伝するパウロと同じ立ち位置に身を置いている。十字架を中心とする生き方である。それは、たとえば第一コリント書六章、九章において人々のために自身の権利を拒否すること、第一コリント書八章と一〇章において弱い人々のために自由を拒否すること、フィリピ書二章において他の人を支えるために地位を断念することにはっきりと表れている。

では、マルコ福音書の残りの部分を見てもいいと思う。弟子たちの失態は、さらに強まっていく。受難の一場面において、弟子たちはまさに寝入ってしまうのだ。象徴的に彼らはゲッセマネで目を閉じ、目をそらす。受難が始まる際、盲目のバルティマイの目が開かれ、受難に向かう「道」に従う姿とは対照的である(一〇・五二)。だが、弟子たちは反抗する。一四章四七節にあるように剣を持って向かうことすらする。彼らの側からは裏切る者、否認する者、さらには逃げ去る者も出てくる。次々に醜態をさらすことは、ポジティブな役割を果たす脇役と対照をなしている。バルティマイだけではない。弟子たちとは違い、埋葬の準備としてイエスに油を注いだ女性もイエスの受難を受け

神の子をまだ理解できておらず、むしろ、十字架に従うことへの道と実存的に関わり合う人こそがはじめてそれを理解できる。

7 喜びの使信

苦難と十字架は、受動的な苦難への覚悟を取り込むだけではなく、能動的な側面も示している。これは、マルコの物語のさらなる過程で示されている。八章三一―三三節の後、マルコのイエスは、二回目と三回目の苦難を預言することにより、九章と一〇章において二回、苦難の前兆として自身の死を告げる鐘を打ち鳴らす。その度に、弟子たちの反応は奇妙なことにも実に場違いなものである。九章三三―三四節において、誰が最も偉いのかを議論している。一〇章三五―三七節では、天国で最も高い地位を得ようと求めている。苦難への覚悟と栄光を求めることとのコントラストは、これ以上、明確に記せないだろう。八章にあるように、弟子たちの苦難への拒絶に対して、イエスはさらにまた苦難を要求している。しかし、この箇所ではイエスはより具体的な表現をとる。九章三五節によれば、十字架に従うことは¹⁵子供のよう¹⁵に最後の者になることを意味する。地位につくことを拒否するのだ。さらにまた、一〇章三八―四五節によれば、十字架に従うのは仕えることを意味している。それは、まさに食事の奇跡の際に弟子たちがまだ理解できなかったことである。仕えることと、一番ではなく最後になることを受け入れるのは、能動的な苦難 (*Passio activa*) という観点において、マルコにとって十字架に従うということの具体的な意味になる。能動的な苦難は積極的なアガペー (愛) と一

関する宗教的なあらゆる観念が危機に陥るとはつきりと述べるからである。それは、「十字架の言葉 (Λόγος τοῦ σταυροῦ)」が神にまつわるこの世の宗教的な観念を破綻させる、とパウロが述べたことと同じである（「イコリ一・一八以下」）。すぐさま、マルコの弟子たちは、彼らが理解しなければいけない次の新しい課題に失敗してしまふ。イエスが苦しみを受けることに対し、ペトロは激しく拒絶し、「サタン、引き下がれ」と再度、叱責を受ける。弟子たちにとつてさらなる驚きとして、イエスが自身の苦しみを予告するだけではなく、苦難に従うことも呼びかける。「わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」（八・三四）。「道」の途上で私に従いなさい、ということである。この道は、マルコ福音書のメタファーとしてエルサレムでの受難への道を意味している。十字架に従うということは、これから弟子たちが理解する過程の中で飲まなければならぬさらなる苦い薬である。

物語のこの部分において、弟子たちを映し鏡として見ている教会のあらゆる読者は、「そうです、もちろん、私たちはこの十字架に従うことのただ中にいます」と軽率な答えを述べることはできないだろう。ここにおいて、遅くとも教会の読者は、まさに物語の中の弟子たちのように、試されているのだ。十字架に従う生き方に抗う弟子たちと同じように、読者らも批判されている。ここには読者への批判とそれに伴って教会に批判を加える福音の要素が存在しているのだ。

マルコが理解している福音は、真実であると頭で認識できるかどうかという神の子にまつわる教えだけではない。福音は不愉快でラディカルなことも求めている。福音はその人そのもの、その存在のすべてを独占するのだ。必要があれば、拒絶と苦しみを求める。頭の中だけで教えを受け入れる人は

たことを、弟子たちは理解していなかった。さらなる記述が示しているように（六・四一、四三、実際に食べ物を増やす奇跡の際、弟子たちは給仕の役割を担うべきであったことが分かる。しかし、特に九章と一〇章において醜い形で描かれているように、弟子たちには給仕をするという発想すらなかった。

多くの人々に食べ物を与える最初の驚くような体験の後、弟子たちの態度はその二回目の際にして、さらに瞠目に値する。ここに至って弟子たちは、一回目の奇跡の際に理解できたはずなのに、「こんなに人里離れた所で、いったいどこからパンを手に入れて、これだけの人に十分食べさせることができるでしょうか」（八・四）と問う。二回目の嵐を静める出来事の際して、弟子たちは自身の無理解を次のように示している。彼らは驚き、イエスが幽霊であると述べるのだ（六・四九）。イエスが湖の上を歩いた後（六・五二）、マルコは弟子たちの振る舞いを説明している。「パンの出来事を理解せず、心が鈍くなっていたからである」。七章一八節では、「あなたがたも、そんなに物分かりが悪いのか」と叱責される。八章一四―二一節では、弟子の無理解をまとめるために、マルコは弟子たちのパンの奇跡の際の無理解について、長いセンテンスを用いている。

簡潔に述べると、八章二九節のペトロの告白において、この弟子たちの無理解の部分はようやく終わりを告げるのだ。盲人の癒しの後に、象徴的にこのナザレ人はイスラエルが待ち望んだ神の子たる力に満ちたメシアである、と目から鱗が落ちるようによく気づく。だが、この頂点においても休息は与えられない。すぐに、弟子の無理解は質的に新たな段階へと登って行く。先の事柄に続き、イエスは人々の期待に反する形で神の子メシアとして自身が苦しみを受け、それまでのメシアに

がイエスの奇跡の業を理解していないことは私たちを戸惑わせる。弟子たちはイエスに従おうとするその熱心さにも関わらず、悪霊や嵐、病に対して命じることができ、神の力を得た特別な存在であるメシア／神の子が、彼らの前に立っているということをもまだ認識していない。彼らは目が見えておらず、それゆえに、考えられるあらゆる誤った対応をしてしまう。それらは読者を混乱させ、もしかしたらその裏を探させ、疑いを持たせ、笑いももたすかもしれない。ここでは、弟子たちに同一化する読者たちは、弟子たちによって映し出される、自分に向けられた批判的な視点を通して答えることができるからである。「やれやれ、ここでは信頼を寄せることが赦されている力に満ちた神の子が働かれていることが分かりました。洗礼を受けて以来、それが私の信仰です。さもなければ、このマルコの書物を読まないでしょう」。

ではここで、八章までの物語の中で何が起こるのかを検討したいと思う。偉大なる奇跡が次々に起こる。嵐を静めた後、恐るべき悪霊であるレギオンを追い出し、ヤイロの娘を起こし、二回の食事の奇跡がある。湖の上を歩くことを伴う嵐を静める二回目の奇跡があり、七章には耳が聞こえず舌のまわらない人を癒す生き生きとした記述がある。この書物のなかで、このような多くの奇跡の出来事の記述がまとめられている箇所は他にはない。同時に奇跡物語はより長く、詳しく語られている。このクレッシェンドは、弟子たちのイメージにあるデクレッシェンドとは対照的である。弟子たちは読者をますます不安にさせる。彼らは、イエスの命令により五千人の人々に食事を与えるために、パン屋まで走り、多くのお金でパンを買うべきか悩んでいる。これはイエスを信頼していないことの表れだ。人々に食事を与えるように述べたイエスの指示は、彼らが考えていたのとは別の意味を持っている。

に弟子という分かりやすい存在について語っている。共観福音書の黙示部分の最後で、次のように語る。「あなたがたに言うことは、すべての人に言うのだ」(一三・三七)。この言葉の意味内容は、マルコ福音書でイエスが述べ、行ったことすべてに当てはまる。

では、弟子たちへの同一化のプロセスは、どのように機能しているのだろうか。最初に弟子たちへの同一化は読者に喜びを与えている。イエスと関わり合い、すべてのことを打ち捨て、彼の道に従う弟子たちがそこにいる(一・一六以下、二・一三以下、三・一三以下)。さらに、イエスは自分の代わりとして、説教をするだけではなく、悪霊を追い出すことも弟子たちに任せている(三・一四以下)。彼らはイエスの家族へと高められ(三・三四)、それが四章まで続くが、そこで最初に不愉快なことが読者に起きてしまう。四章で弟子たちはたとえが分からず、たとえの説明を必要とする。彼らはどうしても理解することができない。しかし、ここではまだ、読者はポジティブに受け取ることができる。イエスは使徒への特別な教育を価値あるものと考えている。それにも関わらず、弟子たちのイメージにまつわる空に、どんよりとした雲がこの章の最後に現れる。湖に嵐が起こった際、弟子たちの師は船の後尾で寝ており、弟子たちは初めて叱責を受ける。「なぜ怖がるのか。まだ信じないのか」(四・四〇)。この箇所において、マルコの読者は選択を迫られる。弟子たちへの同一化を次第に控えていくか、または、私は自身の悪い天候状態において、同じようにイエスを信頼できるだろうかと自問するのだ。

次の章では、いわゆる「弟子たちの無理解」がさらに色濃くなっていく。まず、八章二七節以下にある分水嶺といえるペテロの告白まで、それ以前の嵐を静める箇所に記載されているように、弟子たち

対応している。このことにより、誤って受け取られがちである一章一節と一章一四節の緊張は緩和される。教会が神の子たるイエス・キリストについての喜びの使信を宣べ伝える際（一・一）、教会は同時に神について宣べ伝えることになる。イエスは彼の業の中でこの神とその支配とを理解させる。

6 十字架に従う

教会から「すべての民族」（一三・一〇、一四・九）¹⁴に宣べ伝えられるイエス・キリストの福音は、永遠の命への扉を開くことよってのみ救うのではない（八・三五―三六、一〇・三〇）。それを宣べ伝えるキリスト者にとって不愉快なものでもある。福音と関わり合い、さらにそれを宣べ伝える者は、苦しみを受け、命を失い（八・三四―三五）、断念し（一〇・二九）、迫害を受ける（一三・一〇―一三、一〇・二九―三〇）。すべて、この福音のゆえにである（*skazav toj sbyryeljou* 一〇・二九、八・三五）。福音はキリスト者への迫害をもたらし、苦難と十字架を担う生き方を覚悟させる。

しかし、福音は十字架に従うことへの呼びかけを拒むキリスト者と教会をも批判する。この批判の要素、つまりは福音の教会批判的側面を理解するために、いくつかの解釈学的な前置きが必要になる。マルコはいわゆる「包括された物語 (inclusive story)」を提供している。それは、読者を文学上の役者である弟子たちへと同一化させ、福音の物語世界を通して、イエスと共に道を進む弟子たちと歩むように招く。読者にとって物語られたイエスは、同時に復活を遂げた高挙の存在であり、弟子たちによつて表現されている教会と共にその道を歩む。マルコは特徴的な箇所、自身の共同体のため

は救われ、生きる。これこそが、すべての教会の喜びの使信の基礎となる。

5 時は満ち、神の国は近づいた

さらに、マルコ福音書一章一節の後、一章一四―一五節において、私たちは再び福音概念と出会う。一見すると、二つの箇所は緊張関係にあるように思える。一章一四―一五節で、マルコはイエスの告知を次のように要約している。「イエスはガリラヤへ行き、神の福音を宣べ伝えて、『時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい』と言われた」。「神の福音」は一章一節の表題にある「イエス・キリストの福音」と同じように、教会が異教徒への説教の際に用いる宣教告知の決まった術語である。¹² マルコ福音書一章一四節と一章一節の相違は意義深い。教会はイエス・キリストの福音を宣べ伝える(一・一)。それに対して、イエスは神の福音を宣べ伝える(一・一四)。その福音は同時に教会の宣教告知でもある。教会はその宣教説教において、神の福音を宣べ伝えるため、次のような関係を理解しなければならぬ。共同体は神を宣べ伝えることにより、イエス・キリストの福音を説教する。また、次のように言い換えることもできるだろう。教会は神について語ることにより、イエスについて語る。この啓示神学の重要な思考形態は、「時は満ち、神の国は近づいた」と表明する、イエスが宣べ伝える神の福音と対応している。¹³ マルコが記すイエスは、この言葉と共に自身の現実を示していく。今や神はその活動の内に、その支配と共に到来するということである。これは、イエスの業とその歴史、神ご自身とその救いがすべての人々に啓示されるという教会の根本的な確信と

マルコはまず高い次元から始めている。神ご自身がイエスを子と認めている(一・一二)。イエスは神によって霊を受ける者となり(一・一一、一二)、神ご自身がこのイエスを準備する。パプテスマのヨハネは、優れた方を指し示すために寄り添う存在に過ぎない。マルコの報告は顕現から始められ(一・九—一二)、その後、神の霊自身が一章二二—二三節において、イエスを荒れ野での試みへと送り出す。しかし、読者はイエスが屈することがないことを知っている。イエスは試みを受ける普通の人間ではなく、神の子だからである。神の子は神ご自身によって荒れ野へと送り出されたことにより、サタンからの試みに打ち勝つ。その試みは、ユダヤ教の伝統によれば樂園で動物たちと共に生き、天使が仕えていたアダムが失敗したものである¹⁰。マルコは天や宇宙的な次元に手を伸ばし、パウロのようにアダム・キリスト予型論を暗に示唆する。そして、アダムによって生起されたこの歴史を破棄し、神をこの世に出現させた。この神の子と共に新しい世界が始められたのである¹¹。ペトロの告白(八章)まで続く章においては、イエスはそのあらゆる称号に応じる形で、自然の驚異を静め、病気を癒す主として現れる。イエスは奇跡の際に人々に善きことを行うが、八章からはそれ以前とは異なる二つ目の出現の一面が登場している。イエスは単なる権威者ではなく、苦難の中に身を置き、神に見捨てられた深みに至るまで(一五・三四)、人間の深い淵において十字架を背負う者として身をかがめる。いまやイエスは一章一三節にあるように天使から仕えられる存在ではなく、人々に仕え(一〇・四五a b)、「多くの人の身代金として自分の命」を献げる(一〇・四五c)。十字架の神学者であるマルコにとって、教会が告知する神の子の福音の基礎は、この考えにありますます色濃くなる。苦難の神の子は他の人々のために自身を与えることにより(一五・三九、一四・六一以下)、その人々

語の絨毯を並んで走ることができるようになった。

これまで述べたことが正しいのであれば、釈義は方法的にマルコ福音書に関する純粹に共時的な考察をすることができないだろう。マルコが教会の伝統に義務感を感じている一方、しかしまた、共同体の現状に即した伝承の現在化に対して開かれているのならば、通時的であり、共時的である方法を同時に行うことが求められる。この二つの方法が共演してはじめて、マルコの作品に対して相応しい評価がなされると思われる。

4 神の子とは何か

マルコ福音書一章一節は、福音の内容としてイエス・キリストの神の子性を指している。マルコとその共同体にとって「神の子」とはいったい何か。他の共観福音書とは異なり、驚嘆すべきイエスの誕生物語はマルコ福音書の地平には現れない。イエスの先在も、マルコ福音書一章二節においてイエスに向けられた天からの神の語りの中で間接的に示唆されているに過ぎない。旧約聖書とユダヤ教の伝統において、神の子とは、即位の際、神に子として受け取られた（詩編二、一一〇編）ダビデの王を意味する。ダビデの家から生まれる救い主による将来の希望を育むサムエル記下七章のナタンの預言は、このタイトルをメシアとして意味している。メシア／キリスト、神の子とダビデの子は同義語を形成するようになる。しかし、義人と賢者もユダヤ教では神の子と呼ばれている。この表現は実に幅広い。マルコはその物語を通して、神の子とは誰かを明らかにしている。

ない。マルコが物語の中で説き明かす具体的な歴史を通して、それらに境界線を設けたのである。それによって、好き勝手な形而上学的な思弁に陥ることはない。マルコは教会の告知に歴史的な「はじめ (ἀρχή)」という意味合いを与える。この「はじめ (ἀρχή)」は告知の基準となることによって、自由に現状に合わせることにへの悪用を防いでいる。

3・5 マルコ福音書一章一節のまとめとして、この福音書は教会の伝承の流れに含まれているという視点なしで解き明かすことはできないと言えるだろう。著者はキリストについて語る伝承に伝え、さらに現状に合わせた教会のキリストの告知にも仕えることを望んでいる。「福音」はマルコにとつて（他の新約聖書にとつても同様に）、単なる書物ではなく、教会が伝えるキリストについての現在化された告知である。それは、教会の中で伝承され、定められている歴史と結びついている一方、他方でその都度、それを聞く共同体のために常に新たに現在化することができる。

マルコはそれまで類型として存在していなかったイエスの物語を、独自の形で創り出したことは、次のことと関係づけられる。マルコは歴史的な「はじめ (ἀρχή)」が教会のキリスト告知に特別なあり方で義務付けられていると感じている。彼はヨルダン川での洗礼から復活に至るまで整えられた物語の筋書きを用いて、教会の告知に基盤 (ἀποκρί) を与えたのである。その基盤 (ἀποκρί) は彼にとつて個々の口伝や、すでに記述されていたイエスの伝承などの、教会がそれまで告知の基盤として仕えていたものより確かに思えた。それまでの伝承からのパッチワークとして表れていたものが、マルコの手によって統一感のある物語の絨毯となったのである。一六章にわたり、語る者と聞く者とがこの物

さらに、次のことも忘れてはならないだろう。他の新約聖書文書やマルコ福音書の影響史に含まれるのは、新しい文書群だけではない。「活きた声 (Viva vox)」、「つまり、口伝の伝承もそこに含まれる。それは、すでに記述された福音書があるにも関わらず、二世紀の伝承として生きながらえたものである(エウセビオス『教会史』三・三九・四のパピアス)。口伝の伝承は福音書の中に記され、教会の告知の中で再び「口伝化」されていった。もともと口伝伝承を記したQ文書にも同じことが起こった。Q文書の背後にある放浪の預言者たちは、パレスチナにおいて、口で伝える伝道説教のための補助として記されたQ文書を用いたのである。

マルコがその受信者に対して現状に合わせることへの自由を与えるならば、教会の伝承への拘束性にも関わらず、自身の前にある伝承に対しても、そのような自由を用いたと思われる。つまり、彼も自身の共同体と十字架の神学の視点のために用いる伝承を選別し、現状に合わせたはずである。近年の編集史と物語批評の研究の成果が示しているように、マルコは先のことを行った。その結果として、あらゆる伝承への拘束性にも関わらず、マルコ独自の神学的プロフィールが明らかになったのである。

3・4 「はじめ (ἀρχή)」は時間的な開始の時機も示すゆえに、続けて次のことも言えるだろう。

マルコは、教会にとって根本となる定まった過去について伝えていく。つまり、イエス・キリストとその神の子性(一・一)についての教会の告知は、具体的な歴史と結びついていく。それゆえ、キリスト論とそれに一致する救済論は、歴史性のない形而上学や、神話の中で解消できるようなものでは

を表明することを意味している。おそらく、マルコはこの「はじめ」(ἀρχή)「で」、「ここから私の書物が始まります」と示唆したのではないだろう。「はじめ」(ἀρχή)「は、マルコ福音書一章二—三節、または一章二—六節を指しているだけではない。教会を通して全世界(一三・一〇、一四・九)に伝えられる福音の「はじめ」(ἀρχή)「は、バプテスマのヨハネだけでもなく、一章二—三節にある旧約の預言者たちでもない。⁶むしろ、「はじめ」(ἀρχή)「は、マルコの書物が語ることのすべてを含んでいる。「はじめ」(ἀρχή)「は、マルコが、先在(一・二二)、洗礼から十字架の死、そして復活に至るまで語っている地上のイエスの歴史と一致している。⁷

「はじめ」(ἀρχή)「は時間的な開始である一方、その内容は基盤、基礎も意味している。教会の告知と基礎との間にいかなる関係があるかは、マルコは直接的には語らない。マタイにおいては、それはより分かりやすいだろう。マタイにとって、イエスの教え自体、教会の告知の内容であり(マタイ福音書二八・一九以下)、教会はイエスの告知をさらに伝えていく。だが、マルコは違う。彼は教会の告知は常に新しくされなければならないという考えから、出発しているように思える。つまり、教会はマルコが伝えているような基礎を常に新たに展開し、現状に合わせていなければならない。基礎の上に教会を建てるが、しかし、必ずしもその基礎をまったく同じように再現する必要はない。これがマルコの意図であり、その影響史の中で彼の意図は確かに達成されたとと言える。マルコは基礎を組み立て、それに続く福音史家たちが自身の作品においてマルコの内容を展開し、その共同体の状況と神学的な関心に合わせていった。後の福音書におけるマルコ福音書のさらなる展開は、まさにマルコの独自の意図だったのかもしれない。

ではない。それを第一に伝えたいのは、マルコの後に記され、Q文書からの言葉を用いたマタイ福音書になるが、マルコにおいてはイエスの言葉は実にわずかである。それゆえ、マルコ一章一節ではイエス・キリストについての告知のはじまりというのが、その内容になる。

3・2 初代キリスト教において「福音 (εὐγγέλιον)」とは、いわばキリストと神についての教会の宣教告知のためのテクニカルな表現である。マルコの書物の表題で私たちがこの表現に出会うのは、マルコが教会の主張を掲げているからである。マルコは教会で宣べ伝えられていたことと彼の共同体内ですでに信じられていたことの「はじめ (ἀρχή)」を伝えなかったのである。この主張は、マルコの主体性と彼が自由に書き記すことへの制限を課している。マルコは、教会とその告知の中に自身の作品を据えることを望んでいるゆえ、彼は自身の作品を教会の公の場において、無名のままに留めたのである。私たちが今日、編集史や文学批評を通して知ることができる彼の著者としてのプロフィールは、実は彼にとつてはあまり重要ではなかったと思われる。マルコは、教会の伝承の流れを守るつもりでいたからだ。この流れから、彼の書物のための素材を生み出したのである。マルコは一章一節をもって表明しているように、彼に対して、教会の告知が決まった形で与えられたことを理解している。

3・3 では、「はじめ (ἀρχή)」とは何を意味するのか。⁵ 文献学の決まり事に従えば、マルコ一章一節にあるように述語のない節は、その書物の始まりにおいて、すべての章の表題として書物全体

会の間で受容され、変化し、さらに今日まで独自の作品として影響を与え続けている。

3 マルコ福音書について

おそらく、マルコ福音書の著者は、パウロの伝承から福音概念を受け取ったと思われる。パウロによる福音の用い方については、次章で詳しく検討したい（第一部第二章参照）。マルコは自身の書物を「福音書」と名付けていないにしても、これから私たちが見るように、一章一節で自らの書物について深く考えている。この書物の表題は「イエス・キリストの福音」ではなく、「神の子、イエス・キリストの福音のはじめ」となっている³。この表題はいったい何を意味し、また、何を意味していないのだろうか。次に見るように、いくつかの観点からこれについて検討できる。

3・1 まず、マルコ福音書一章一節の「神の子、イエス・キリスト」は目的語的属格か主語的属格かが問題になる。「神の福音 (εὐγγέλιον τοῦ Θεοῦ)」と関連付けられたマルコ一章一四節は、著者が「福音 (εὐγγέλιον)」にかけた属格を目的語的と理解されるのを望んでいることを示している。つまり、マルコ一章一四節において、神は内容であり、告知する著者ではない。この節において、主語であるイエスが神についての福音を告知するからである⁴。

さらに、一章一節の主語的属格理解に対する反証は、マルコ福音書全体から導き出すことができる。（一章一四節にも関わらず）、告知の主体としてのイエスが語ることをマルコは第一に伝えたいの

り、「福音主義」教会へと受け継がれていった²。だが、この展開の過程の中で、皮肉に満ちた現象が起きてしまった。当初、中世において教会への批判を意味していた概念が、近代において教会のため の概念へと変わってしまったことである。では、このことによって、福音概念における教会批判の観 点は失われてしまったのだろうか。今日の教会は、この問いを甘受しなければならぬ。しかし、私 たちがこれから見るように、マルコ福音書に取り組み、その教会批判的な側面をしつかりと受け取 り、そこから自らに問いを差し向けるならば、今日の教会はその教会批判の立場を維持することがで きると考える。

2 福音とは何か

では、聖書の「福音」とは、いったい何を意味しているのだろうか。まず、私たちは、文学的な類 型概念である「福音書」、つまり、新約聖書の正典に含まれる四つの福音書と外典に含まれる数ある 福音書を思い浮かべよう。福音概念はマルコ福音書の著者が見出し、彼自身はその文学作品を 「福音書」と名付けていないにも関わらず、その時代に新しい文学類型の名称へと展開されたからで ある。この福音概念の文学類型へのさらなる展開は、マルコ福音書がいかにセンセーショナルな成功 を成し遂げたかを示している。マルコの書物は、すべての文学類型の起点になったばかりではない。 この書物はまた、新しく創られた数多くの作品群と並んで存続しながら、それらに取って代わられる こともなかった。編纂され、失われてしまったQ文書とは異なる。マルコ福音書は、短期間に古代教

第一章 福音とは何か——マルコ福音書における〈福音〉概念

ペーター・ランペ

1 福音主義とは

宗教改革五〇〇周年を記念する二〇一七年、私たちは福音概念について深く考えてみたい。「福音主義 (evangelisch)」は、中世においてすでに、教会を批判するひとつの生き方を意味していた。それは特別な形で福音に即しており、教会の高位聖職者の生活態度とは異なるものであった。宗教改革時代、「福音主義」という概念が宗教改革の教えを意味していた際、教会に対する批判の観点もそこに貫かれていた。宗教改革者たちは、その教えを聖書の福音から導き出し、とりわけ教会の伝統から供給されていたローマ・カトリック教会の教えとは、対極に位置する教えを形作るという主張を押し進めた。「福音主義」という概念は、宗教改革の教えから、ついには宗教改革から生じた教会、つま